

[Article]

## The traditional and current life-death gradations in Japan

Giko Shimazaki\*

\* Aobaoka Department of Nursing Care, Aino Gakuin College

### Abstract

It seems that the life-death border envisaged by Japan's young generations is being blurred. The younger they are, the more likely they are to be less aware of life and death surrounding them.

This is because they do not have many direct experiences of such serious incidents in everyday life. Many of them seem to think that the dead will be resuscitated like TV game heroes.

In Western society, which has been influenced by Christianity, there is a clear boundary line drawn between two spheres, but we Japanese never have had such a manifest distinction throughout history. This tradition may be partially responsible for the young generations' inclination toward the gradational life-death view.

**Key words** : life, death, gradation

## 〈生死（しょうじ）〉と〈生死（せいし）〉のグラデーション

島 崎 義 孝\*

【要 旨】 現代のわが国では、若い世代になるほど生と死との明確な見境が失われつつあるように見受けられる。自分たちの日常生活の周辺で、死に直接かかわる機会が減少しているからであろう。たしかに現代は若い世代の人たちも含めて、以前であれば誰もが嫌でも経験せざるを得なかった生死の現実をいよいよ見ない社会に生きている。

欧米社会はキリスト教の強い影響下で、伝統的に生死を明確に分けて捉える伝統の中に身をおいてきた。しかし、わが国では通俗的な生死の観念が色濃く作用し、仏教移入後も、むしろ仏教の教説をたくみに換骨奪胎させながら独自の、連続性をもった生死観を形成してきた。ありていといえば死の世界の仮説や物語は実証方法がないため、あらゆる憶測や伝承、仮説が生き続け、それが巧妙かつ乱麻のごとく長年にわたって人々の観念の中に定着してしまっている。

それが現代に至って、以前からある生死観を引きずりつつ、同時に現実の死の実感を希釈させてしまい、それらをない混ぜにした非連続性のある広汎な「生死感」のようなものが形成されつつあるようだ。しかしながら、それはいよいよあやふやな、かつ感覚的・無感動で底の浅い生と死の内容しかもたなくなってしまうのではないだろうか。

キーワード：生，死，グラデーション

### はじめに

近年、日本社会のこれまでの他界観、生死観が大きくゆらいでいるのではないか、このような感慨をもつ人は決して少なくないであろう。理由のはっきりしない殺人事件や凶悪犯罪が増加している。それぞれの専門家たちが原因についていちおうの見解を述べるけれども、その説明はどこか釈然としない。重大な事件が生じる背景には無数の要因があるはずだが、とくに殺人事件などが生じる場合、生と死についてのその時代・社会の感じ方、捉え方が根底で強く影響しているはずである。

わが国の社会には歴史を通じて、多くの人々に生と

死に対するいちおうの共通した感覚のようなものが形成され、根付いていた。だが、そのいくらかの部分が現在ではしだいに、しかし確実に崩れつつあるように思われる。本文でも見るように、従来は一定の連続性をもった生と死のつながりが保持され、われわれはそうした観念にしたがって生活し、死者たちとの交信をおこなってきた。ところが現在では、亡くなればそれまで、また、生も死もきわめて即物的に捉えられている傾向は強まっているのではないだろうか。かつてわれわれの祖先たちがもっていたような、生と死に対するある種の連続感や親和性は大きく後退したように見える。

小論ではそうした相互に親和性や連続性をもった生

\* 藍野学院短期大学 第二看護学科

と死との関係性を〈しょうじ〉と呼び、即物的で断絶した捉え方を〈せいし〉と強いて表現する。親和性、連続感というのは、死者が生きている人々の記憶に残り、生きがいや精神的な支えになり、落ち着きや安心をもたらしてくれる当のもの、あるいは社会のなかで自分の居場所、落ち着き場所を提供してくれるひとつの根拠としてのはたらきをもつという謂である。逆に即物的、断絶というのは、文字通り死ねばそれまでで、生きる人々に何も残さない。死は否定され忌避されるべきものとして、封じこめられるありかたである。現代のわが国の人々がいだく生と死に対する感覚は、輻輳しつつ、また、絶えず変化しながら〈しょうじ〉と〈せいし〉の間を定見なくさまよっているといえるのではあるまいか。この傾向なり事実がいくらかでも確認できれば、それは日本社会におけるこれからの生死観の一断面を示すことになると思われる。

## 第1章 子どもの殺人事件と無〈死〉の世界

数年前に長崎で小学校5年生（12歳）女兒が、同級生の女の子を刃物で殺めるという痛ましい事件があった。新聞は「明らかになった事実の中で、際立っているのは、事件直後の女兒の沈着ぶり。着替えを済ませた後、自分がやったと話した。涙を流すことなく、怯えたようすもなかった」と報じた（2004年7月2日、西日本新聞）。全国紙の記事でも類似の観察や聞き取りを記事にしている。また、その前年にはやはり長崎市で、男児の誘拐殺人事件が起こった（2003年7月20日、朝日新聞）。この時にも子どもは平然と取調官の質問に答えていた、と新聞は報じている。たまたまここでは同じ地方で生じた事件を例に出したが、いずれも加害者が子どもであったこと、さらに彼らが犯行後も表情をほとんど変えることなく淡々としていたということが社会を震撼させた。

その前後にも小学生や中学生によるいくつかの殺人事件が全国各地で生じているので、そのたびにまたかという印象を多くの人々がもったと思われる。一部の人たちからは、こうした類の事件が起きるたびにマス・メディアがセンセーショナルに報じるから、報道そのものが更なる事件を誘引しているのではないか、という疑問がだされたこともある。あるいはメディア網が現在ほど迅速性も広域性もなかった時代にも、日本中のどこかで少年によるこのような凶悪犯罪が同じように発生していたかもしれない。時代や社会のようすが変わっても、似たような事件は同じように頻繁に

起きていたという指摘もある。

実際には少年による凶悪犯罪の発生件数は過去数年、減少傾向にあり、殺人事件は1955年ごろから10年余りは300～400件で推移したが、近年では二桁に下がっている<sup>1)</sup>。事件の数そのものは減少しているのである。にもかかわらず、これらの事件が社会に及ぼした衝撃は大きかった。事件の発生件数もさることながら、問題はむしろ「表情をほとんど変えることなく、淡々と」凶悪事件が発生しやすくなった社会そのものの、人々のこころのあり様の変化にある。この種の事件は、いまや決して日本社会のごく一部にだけ生じているのではない。こういった犯罪が、「普通の家庭に育った、まじめで素直な子どもたち」によって引き起こされているのである。ごく普通の日常生活を送っている子どもたちが、容易に事件の当事者になる可能性を潜在的にもち始めているということなのである。

先に見た事件の加害女兒に対して9月に行なわれた少年審判では、「女兒の『死に対するイメージ』が希薄だった」と指摘された。そのことから、佐世保市教育委員会は県内の児童、生徒3,600人を対象に、生と死のイメージについての意識調査を2004年、11月～12月にかけて実施した。その結果には、いかなる意見を持つ人も、おそらく驚愕の色を隠せなかったのではないだろうか。アンケートには「いったん、失われた生命がもう一度生き返ると思うかどうか」といった質問内容が含まれていたが、集計結果は調査主宰者の予想をはるかに超えて、「生き返る」とした回答が多かったからである<sup>2)</sup>。調査では、15.4%が「死んだ人が生き返る」と回答した。小4生で14.7%、小6生で13.1%、中2で18.5%にも上る。理由を尋ねたところ、全体平均で「テレビや映画などで生き返るところを見たことがあるから」が29.2%、「ゲームでリセットできるから」も7.2%あった。自由記述では、小中学生とも「人は死んでも心の中で生きている」や「医学や科学が進歩すれば、生き返ることも可能」などといった回答もあったのだ。ファミコンなどのゲームで競われるサバイバル・ゲームにどっぷりと浸っている子どもたちにとって、画面の悪漢やヒーローがゲームのなかで負けたとしても、リセット・ボタンを押せば再び生き返り、再度ゲームに挑むことが可能である。だから現実の人間や動物がいったん死んだとしても、どこかにリセット・ボタンのようなものがあってそれを押せば復活すると考えるのかもしれない、というのが結果を分析した専門家の意見だったという。

だが、実際にはそんなボタンがあるわけではもちろ

んない。それは現代の子どもたちには、現実とフィクションとの区別が容易にはつきかねるといことなのだろう。しかし、こうした回答が少なくなかったというのも、まったく予想できなかったというわけではないだろう。なぜなら、現在に近く生を受けた者ほど、つまり年齢の小さい者ほど、現代のわが国では生々しい生や死の現実を目にする機会がいよいよ少なくなってきたからである。

このことは人間の生や死だけについて当てはまるわけではない。たとえば、われわれの大半がほぼ毎日口にして「肉類」のことを考えてみても、生と死の現実感が希薄になりつつあるという現実には容易に理解できる。それはすでに不要物をほとんど取り除き、きれいに整肉されて店頭並べられた牛肉や豚肉、あるいは鶏肉などである。われわれの食欲を刺激するように、白いトレーに整然と切り分けて並べられている商品なのである。子ども、そして大人でさえ、多くの人々はそれらの肉に生命があったという事実を知ろうとはしないし、あえて想像しようともしない。いわんや店頭にならべられるしばらく前まで、それぞれの肉に顔や手足、目玉、頭などがついており、体温もあり、声を出しながらエサを口にしていたことなど思いを馳せようともしないのである。人の手によって直接・間接に〈処理〉（屠る、殺される、いのちを奪われる）されるまでは、骨格をもち、血液を体内に循環させながら、動き回るひとつの生命体だったことなど毛頭考えない。ましてや商品になりえないような、そうした動物たちの不要な部分、残滓の末路はおそらく大半の人にはまったく関心の外の事柄であろう。また、そのような業務に携わる人たちが誰であり、どういった思いで、どのような仕事ぶりをするかといった事柄も、美味な「食品」をどのようにして食べるかという旺盛な食欲のまえでは雲散霧消してしまっている。だが、そうした「死の現場」<sup>3,4)</sup>が存在することは紛れもない事実だし、われわれの生命を支えるべく加工された夥しい生命が日々捧げられていることも真実なのである。あるいはこんどは、食べ切れずに廃棄されるゴミとしての肉類にも関心が及ばないのも同断である。まして〈ゴミ〉と成り果ててしまった死体の末路などは、見ようともしない。食肉の加工についてだけでなく、それに関わる人々の苦悩、やるせなさ、社会から向けられる偏見に対する鬱積した気持ちなどについても自分とはかかわりがなく、という態度である。われわれはじつは薄々気づいているのだが、不快な部分からは、敢えて目を逸らそうとする。

また、われわれが人生の最後を迎える場所も、ずいぶん様変わりしてしまった。自宅で亡くなる人と病院などの医療施設で最後を迎える人の数が1977年あたりをさかいにして、後者での割合が急速に増大していることが統計的に知られている<sup>5)</sup>。都市化と並行して進んでいるとされる核家族化によって、子どもたちは高齢者との生活経験をもたないまま成長することが多くなっている。その結果、〈古い〉の実態をつぶさに知らない、それが自分自身の将来の姿であるという想像力が容易に働かないのだ。いわんやその行き着く先の〈死〉の現実を知る由もないであろう。醜いもの、嫌なもの、遠ざける。自分には関係がない、知らない、その必要もないという態度で、ただ遠い目線で傍観者的に見ることが多い。従来は通常、家族や近親者が行っていた死後の身体処理、たとえば死に水をとるとか、湯かんなどの一連の作業は、現在では大方は医療関係者が医療行為の最後の仕事として行っているというのが実情であろう。看護師がエンゼル・セットと呼ばれる道具類を使って遺体処置を手際よく行い、遺族は処置を終えた姿を見るという状況が増えている。病気や高齢で亡くなる家族の最後の床を取り囲むのは遺族・家族ではなく、やや誇張すれば、心電図などの医療器械であるともいえそうだ。ここでも死の現実をわれわれが如実に体験する機会は、ますます減少しているといわなければならない。

## 第2章 伝統的な日本人の生死「感」

### a) 重層する生と死の観念

ヨーロッパやアメリカでキリスト教が大きな影響力を発揮したのと対応するように、わが国ではやはり仏教の影響が強かったが、その移入以前と以後では、われわれの祖先の生や死に対する見方、捉え方はやはり相当変化していったと考えられる。ただ、ナマの死の現実の前では、歴史的に大きなはたらきをしてきた仏教などの既成宗教も、必ずしも十分な威力を発揮してきたともいえないようだ。既成宗教はそれなりに深く関与しながら、それだけでは覆いきれないところの層が幾重にも重なって、ひとり人間の生死観を形成しているらしい。そのひとつの具体的な例を、以下の記事が示している。

1985年8月、群馬県御鷹山の日航ジャンボジェット機の墜落事故といえ、520人もの人たちが犠牲になった大惨事だったが、1992年（4月20日）の朝日新聞に次のような記事が掲載された。毎年4月

29日になると慰霊登山が解禁になり、満を持した幾組かの遺族が一斉に険しい尾根を登っていく。5ヶ月間は積雪のため入山できないからである。そのひとり、当時21歳の息子を失った男性（59歳）はこの日、72回目の登山を行った。山に登ると「息子が〈待っていたよ〉と言ってくれているような気がする」というのだ。5ヶ月間の空隙を埋め合わせるかのように、丁寧に付近を清掃し、持参の供物を供えてから、この男性が墓標に額づいて敬虔に合掌している姿が写真に収められている。

仏教徒だという。おそらく自宅には仏壇をしつらえ、息子の遺品を周囲において朝な夕なに礼拝を欠かさないのである。すでに戒名が授けられ、仏式の作法にしたがって供養をかさねてきた。その間にはしだいに気持ちの整理がつき、序々に息子との別離がなされてきたはずだが、それらはこの男性のより深い心の琴線にふれるところまでには達していなかったらしい。だからこそ72回もの、容易ではない登山を繰り返し敢行しているのである。

死んだ人との辛い別れ、苦しい経験、苦い思い、などもたいていの場合、時間と共にしだいに希薄化し、時おり思い出して悲しみや感慨にふけることはあっても、遺族はそれなりに日常生活を淡々と営んでいけるようになるものだ。大方は時間が自然に辛さや悲しさを希釈し、解消してくれるのである。だが、この男性の場合、「何年たっても心の中までは風化しない」という。

この父親はことさら亡くなった息子に対する思い入れが強いのだろうか。息子にたいする期待、それが途中で無慈悲に断念させられた無念、……。遠く故国を離れた戦地で無念の戦死を遂げた旧日本兵の遺骨収集が現在でも行われているが、日本人には才能の開花を中断させられた人々、とりわけて彼らが悲惨で、不慮の死の迎え方をした場合には思い入れがひととき強いのかもしれない。死に場所にも、遺体とは別の故人の何かを感じてしまう心象がわれわれには備わっているのだろうか。それは「無念」というより表現よりは、むしろたゆたう生命に対する「あはれ」といった方がふさわしい。

この父親の心象には、祖先や一族の霊の祭祀などには関心をもたないオリジナルな仏教の教える内容とは別に、さらに精神の深い別の部分でわれわれの祖先から受け継いだ原始的なレベルの意識が看取される。一般の人々の心情には、仏教が基本的にもっている教義や思想とは別の、もっと直截的で素朴な感じ方、思い

方が確かに存在するようである。それは教義や典礼などが確立され、体系化された宗教観、他界観では覆いきれない幅と深さ、奥行きをもっている。だが、そういった広がりはいったい何に由来するのだろうか。日本化された仏教にはもちろん基本的な骨格があるが、一般大衆の宗教意識はそれに土着の民俗的風習などを付加させて、日本社会に固有の生と死の観念を発達させてきた。

#### b) 生死観の4類型

ここで生死観のいくつかの有様について大まかに見ておきたい。気候風土、歴史、民族性など外的な環境と、その人の生活歴や気質、など無数の錯綜した要素によってもたらされる生死観だが、それについて研究者たちはいくつかの型に分類している。たとえば、岸本英夫は4つの類型を示している<sup>6)</sup>。まず、①肉体的生命の存続を希求するもの、②死後における生の存続を信ずるもの、③自己の生命を、それに替わる限りない生命に託するもの、そして④現実の生活の中に永遠の生命を感じ得るもの、である。およその見取り図はこれによって得られるであろう。

これらはいうまでもなくタイポロジーであって、実際にはそれぞれの混合形態として現れるのだが、いずれにも共通しているのは、現在自分が享けている生命はこれ一回きりではなくて、現実にはかたち（具体的には身体）がないとしてもなんらかのかたちで継承、もしくは存続するという、いわば願望のようなものが感ぜられる。岸本の記述にしたがえば、まず、①に属するものは、中国の「神仙思想」などがそれである。不老不死や不老長寿が祈念される。当面の死の克服と暫定的な肉体的存続が問題になる。また、肉体にはいちは死が訪れるが、時節が来れば肉体は再び生命を得て、以後は永遠に滅びることのない不死を得る。エジプトなどに見られるミイラの考え方も、この信念に基づいている。

②は肉体的死は避けがたいものという認識にたつ。肉体的生命は生命全体ではなく、その一部にしかすぎない。いろいろな形での靈魂観が形成される。肉体は滅び去っても魂は滅びることがないという靈魂不滅説であり、原始宗教のきわめて素朴な時代いらい、世界中いたるところで見られる考え方である。天国といたり、浄土といたり、あるいは神の国など表現はさまざまだが、この信念は宗教の違いにはほとんど関係なく古今東西どこでも観察される。問題はそれがどのような形で可能なかである。これには2つの型があ

る。まず、肉体を離れた靈魂は遊離したまま地上に存続するといった素朴な觀念に支えられている型である。孟蘭盆に精霊が戻るとか、灯籠流しはこれに属する。靈魂は冥界に存続し続けると考える。次は輪廻思想であるが、これは前者と類似性を持ち、ひとつの生命がさまざまな生物の肉体を借りて幾度も繰り返すこの世の生活を営むという型である。輪廻思想はこの地上での生活は苦である、という認識に基づいたインド的な厭世思想を基底としている。したがって仏教思想にも強い影響を与えている輪廻思想でも、基本的な部分では生命の循環がいわれるのであって、釈迦の説いた初期仏教の場合にはそうした輪廻の輪から抜け出る、解脱することが希求されているのである。

③は自分の個体の外に自分の生命に替わり得る永遠なる生命を見出し、託す。無限の長い生命変化の連鎖の中に自分位置づけようというものである。端的にはその人が生前に残した業績や名声などが該当し、また子どもや子孫へ生命が順次継承されていくことなどが含まれる。現世に生きていた事実の痕跡を残すことで、自己の生命の永続性が担保されるという觀念である。これは現代のわれわれに最も受け入れやすい捉え方だといえるだろう。だが、個々の人間の小さな欲求から出たもので、一見合理的であるが、その根柢の脆弱さをわれわれはうすうす感じている。

④は時間を超えたいわば「体験の場面」(岸本)とでもいえるものである。現在の刻一刻の生活の中に、永遠の生命を感得する。「永遠なる今」を実体験として把握するのである。現在がすなわち永遠として感得されるゆえに、死の煩いから超脱し、生死の問題も自ずから解決されるという立場である。これは洗練された宗教者にとっては常に最も高い理想のひとつである。この体験を真に手に入れることができた者は、日常茶飯の生活そのままの中に、永遠の生命が宿るのを見出す。以上が岸本による「生死観四態」の概略である。

同氏はこの分類のうち④をあるべき生死観と見ている。この立場にたてば、過去にも未来にも、したがって生前のことも死後のこともさしあたって関心の外にある。即今の、いわばこの瞬間々々に永遠を見出そうとする態度である。つまり普通という死後のみとめるのではなく、一瞬に全生命を集約するといったひとつの宗教的な解悟の境地とでもいうべきだろう。当の人間はもちろんやがて死ぬけれども、その人の残したものに全身全霊が現れていると考える。それに対して、①は多くの場合、まとまった思想的な構成をもった生死観ではなく、平生、死に対する心構えができていな

かった者が、にわかに死に直面して、狼狽したときに現れる態度として、低く見なしている。ごく大まかにいうと、わが国では①の考え方はどちらかといえば希薄だと考えられる。たしかに中世には富士(不死)思想のようなものもあったし、「即身仏」がつくられたこともあったが、全体として大きな動きにまではならなかった。

イスラム教やキリスト教の終末観は、②の類型に属すると考えられる。個体としての有限性をもつわれわれが、確かな何か、絶対的な存在と継続的、象徴的な関係をもとうとするのは普遍的、内的な欲求の反映であろう。実際にはその人が生きた時代・社会、具体的な人間関係などの諸々の環境によって、どれがより顕在化するかにしたがってその人の生死観が左右されると考えて差し支えない。

わが国においても、④のように哲学的といつていい考え方も行われてきたが、こうした自覚的な、己自究明的な信条は限られた知識人層や熱心な求道者に見られることで、一般大衆のものになったとはいえない。①の立場も見られたが相対的に限られた範囲を出なかつたと考えられる。けっきょく②や③が多くの人々が、漠然と心の中にいだいてきた死と生をめぐるイメージだったといえる。日本化した仏教の主流もこの類型に分類できるであろう。

### c) 古代日本人の他界観

仏教移入以前に、われわれの祖先がもった死のイメージを知るさいにひとつの手がかりを与えてくれるのが、『万葉集』や『古事記』である。『古事記』の有名なイザナギ、イザナミの神話はよく知られているが、ここには古代人が死を恐れの対象として捉えていたことがよく現れている<sup>7)</sup>。火の神を生んだために自らも火傷を負ってイザナミは死んでしまうが、彼女を慕って夫のイザナギは黄泉の国に出かける。イザナミから「決して見てはいけない」と嚴重に注意を受けていたにもかかわらず、好奇心からイザナミは洞の中をつい覗いてしまうのである。そこで彼は「宇土多加礼許呂呂岐(ウジ虫がたかって、声が枯れ、喉がふさがれた)」、身の毛のよだつような、おぞましい光景を目の当たりにした。かつて美しかった妻のなれの果ての姿を目の前に突きつけられた。それは抽象的な觀念でもなく、宗教や哲学からではない、直接に彼が見た死の現実だったのである。しかし、これはひとりイザナギだけが目撃した事実ではあるまい。いわゆる貴人などは火葬されたり、丁寧に埋葬されたが、一般庶民は墓

場にうち捨てられた時代、人々には共通の日常的な光景だっただろう。死は呪わしく、けがらわしく、なによりも恐怖と嫌悪するべき世界、可能であれば忌避したい領域だったのである。うち捨てられた「死者」の姿は、やがて確実に来るべき自分自身の姿だったのだ。死の国が根堅洲国（根の国）、黄泉の国とされたのは、死が暗黒の不気味な未知の世界であることを象徴している。

他方、古代の人々は別の見方もしていた。人間は死ねばその魂が肉体を離脱し、はるか彼方に去っていくという観念である。遠いところというのは別段目的地や特定された場所があるわけではなく、漠然とした観念、感じ方と言っている。それは山の端であり、空、海などである。

黄泉の国や「根の国」は地下に存在し、「母の国」として産みの大地性をほのめかしているようにもみえるし、柳田国男などが示した「常世国」でもある<sup>8)</sup>。これらはいずれも生の終わりを意味しない。大地性は再生とか、来世観を胚胎しているのである。それは生命の継承をいわば生まれながらに備えている、ひとつの生物としての人間の本能に根ざしたものである。生命現象の根源にまでさかのぼるといい。これらはすべて、人間は死ねばこれで最後、というふうに捉えていないところに特徴がある。なんらかのかたちで未来とか来世、あるいは子孫などとして次のステップに連なっているのである。

#### d) 仏教移入後の生死観の変化

さて、日本に仏教が移入されたのは6世紀だが、それがわれわれ日本人の生き方、死に方にも大きな影響力をおよぼしてきたことに間違いはない。現在でも日本人の生死観の基本的なありようにかかわっていると考えていい。

わが国の中世社会における死の様態を、よく物語るひとつの具体的な例は『九相詩絵巻』であろう<sup>9)</sup>。これは死者が生前につんだ功德によって、またそれに応じて異なる浄土往生の仕方を9段階に分けて説明するもので、もともとは生前に十分な功德・積善をするように人々に勧める発想から出たものらしい。寺院の障壁などに掲げられ、あるいは仏事のさいに人々の目に触れやすいところに曝して、生がいかに虚しいものか不可避なものかを説教式に説いて聞かせるのではなく、視覚を通して想像させるという方法を採用している。9枚の絵は人間の死体の変化のさまを描いたものである。美人と思いき妙齡の婦人が息絶え、その遺体から

異臭が漂い始め、いつの間にか蛆がわく。虫や鳥、獣などがにおいを嗅ぎ付けて、死肉を啄ばみ、餌にする。遺体は雨風にさらされ、黒髪が風に吹き飛ばされ、白骨が露わになる。さらに腐敗が進んで、やがて一体の骸骨になる。これは人間存在のむなしさを如実に知らしめ、諸縁を放下してすみやかに仏道に参じよという動機づけを行なったものである。

こうした絵巻や絵草子の描く世界は、現代のわれわれが目にしていく精巧な映像や音声の技術を駆使した、臨場感のあるコンピュータ・グラフィックが描き出す映像などから見れば単純で稚拙なものかもしれない。だが、当時の人々にとって、家族の誰かの死、野垂れ死した人々、路傍に打ち捨てられて早晩息を引き取る無数の、現実に手の施しようもない人々を間近に目にする機会は、現代のわれわれとは比較にならないくらい多かったであろう。人の目から隠されることなくしばしば生じる死という日常生活上の事実が、死についての単なる観念やイメージをはるかに陵駕していたと思われる。彼らは五感、さらに六感を通じて現実に向き合ってきたのだ。

『九相詩絵巻』には来世も地獄も描かれておらず、死者のようすを嘆く遺族の姿もない。ただ、客観的事実としての死骸の変化が克明に描かれるだけである。死が自然な現象として淡々と描かれているのみで、他界観はなんら示されていない。これなどは日本版の「メモリー [死を思え]」といえよう。仏教的無常観を端的に示している。絵巻を目にした人々に期待されているのは、これを見たそれぞれの人が、自分はこの厳然とした事実を目の前にしてどのように所与の生を全うするかというその一点にある。哲学的・実存的な問題をわれわれに突きつけているのである。そういう意味からいうと、関心は先の④に近い。だが、大方の人々がこの絵巻から得たテーマは、やはり②や③に近いものであったといえるだろう。

死者を仏式に弔うときに、ふつう宗侶（僧侶）の方も一般の人々も「ほとけ」という言い方をするが、そこには両者のあいだにいくぶんのズレがあるように思われる。仏家の立場からは、死者は葬儀のさいに仏弟子として出家し、位は世尊（釈迦）の弟子として仏道を歩んでいることになっている。宗侶（僧侶）が死者を剃髪して（じっさいにはその所作をするだけだが）、戒を誓わせて戒名や法名を授ける。仏道修行者として出家させ、また、解脱したことの証であるとされている。「没後作僧」と呼んでいるが、実際には本人に仏道修行者として自覚があるかどうかとは無関係に、葬

儀の一連の手続きとして行うことの方が多い。こんにちでも「葬式仏教」と非難をこめていわれるはしりの作法である。他方、一般の大方の人々にとって、「ほとけ」はきわめて漠然としている。たんに死者をさすこともあるが、その魂はどこかに漂い、あるいは何かに憑着して、埋葬の後もどこかで自分たちとつながっており、遺族や子孫の行く末を見守っている。古い表現でいえば「草葉の陰」にひっそり佇んで、われわれの行く末を見守っている、といったイメージで捉えているのである。いわゆる「祖霊」として祭られるのだ。

現在でも仏事を行う場合に行われている中陰や忌みの観念には、日本に在来の神道はもとより儒教や道教の痕跡を認めることができるが、とりわけ仏教の強い影響は大きい。われわれの大方の祖先がもった、上という②や③の生死観を仏教サイドから補強したのは有名な『十王経』<sup>10)</sup>である。現在われわれが依拠しているのは『十王地藏経』であろうか。もともと民間に行われていたものを仮にひとつにまとめたというもので、時代によっていくつもの『十王経』があった模様だが、ここでは細部にこだわる必要はないので一括して考えておく。これは10世紀の中ごろ、中国の蔵川和尚によって作られた偽経だとされる。オリジナルな經典というより中国の民衆に膾炙した他界観、来世観を集大成したものである。わが国に移入されたのは15世紀、まさに応仁の乱の時代である。短期間に急速に普及、浸透し、多くの人々に自然に迎え入れられた。哲学的な釈迦仏教とは別の次元で捉えられ、現在でも仏事といえばこれに基づいている。そういう意味で『十王経』は日本人の感性や風土にもきわめて適合的な内容をもっているといえよう。因果応報や積善功徳を勧めるほかに、亡くなった人との漸次的な別れの方法を示しているのである。7日ごとのつとめの7度目、つまり49日目を忌明けとって（死後35日で行うのは便宜的なものであろう）、死者はこの時点で次の生をどこかで享けていることになっている。

遺族はさらに百ヶ日の供養をつとめるが、これは卒哭忌ともいわれているように、故人の亡くなったことを受け入れ、諦めるひとつの区切りである。そして1周忌、3周忌と仏事をつとめ、これでいちおう別かれのケジメとしているのである。さらに7回忌、13回忌……といったように、時々々々亡くなった人のことを記憶に甦らせ、日常生活は支障なく営めるといふ、いわば生者が死者との別離を遂げるさいの知恵といふことができる。仏教に「時薬」という言葉があるが、時

間が解決してくれるという一面はたしかにあるだろう。

しかも49日目にどこかに生まれ変わったはずの死者は、盆や春秋の彼岸にはもとの家族のところに戻り、時季が来ればまた「あの世」に帰って行く。終わりのない往還を繰り返すことになっている。面白いのは、死者は物理的な痕跡を消した実体のない靈魂かといえようではなく、たとえば「三途の川」を渡るときに六文銭を払い（2・7日）、懸衣翁・懸衣姥のところではいったん身包みを剥がされるところをみると身体をもっているらしい。しかし、誰もそうしたことの非合理さを批判し、検証するなどはしない。ナントナクそうした物語に馴染んだ風をみせているのである。

つまりわれわれの祖先たちはそういった近代性からみれば荒唐無稽と思われるような死、死者の世界をおおらかに、漠然と捉えていたのである。49日目の再生のときには、死者は「六道の門」（天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄）をくぐらなければならないが、親しい死者がたとえば、虫に生まれ変わるか、犬や猫に生まれ変わるかにまで関心がおよばない。まさしく諸行無常を体験的に知っていたのであり、その点についてのみえれば彼らは釈迦の説いた教えを正しく理解していたといえるかもしれない。

こんにちではその継承者がだれになるか、無縁墓の急増などが問題になっているが、現在のように一般大衆が一家で、もしくは個人で墓石をもつようになったのは比較的新しい。「〇〇家の墓」というのも明治になって一般人も姓を名乗るようになって以降のことである。それ以前の幕藩時代には大半の人々は土葬で、かつ墓標といっても木か自然石を埋葬した土の上にしつらえただけの簡素なものだった。時が経てば木の墓標は朽ちて、埋葬した遺体の上に置かれた墓石もやがてはもとの自然石にもどる。そこに誰が埋葬されているか記憶している人などいない。「草葉のかけ」というのは比喩でもなんでもなく、実際のありさまだったのである。

わが国では比較的広範囲にわたって「両墓制」が行われていたことはよく知られているが、これは遺体を埋葬する場所と、遺族が墓参に出むく場所とを別々に設ける葬法である。遺体はいったん共同の捨て墓に運ばれるとあとは放置され、そこは生者が滅多に足を踏み入れる場所ではなかった。遺体に関心が示されなかったというよりも、死の忌避という観点から捉えられている。死霊に対する恐怖感がそうさせたものらしい。遺体はやがては腐り果てていく存在で、生きた人間にとって恐怖の対象だったのである。同時に遺体はしだ

いに腐食し、やがては土に還るという過程を、人々は自然な現象として受け入れていたのだ。ここには人間の死体も、やはり大きな生命の循環の中で捉えられていたのである。このとき忌避すべき死霊も性格を変化させ、しだいに祖霊としての転換をとげることになる。

核家族化が進行し、先祖に対する意識にいくぶんの変化が見られるこんにちのわが国でも、以前ほどではないにせよ、家族内で誰かが亡くなったときに仏壇を設けることが多い。欧米人の目には奇妙にうつることもあるらしいが、ファミリー・チャーチ〔家庭内寺院〕と呼ばれるこうした各家庭の仏壇は、彼らの目には奇妙な存在であるとともに、ある種羨ましい器物でもあるらしい。遺影が飾られるのは欧米社会でも同じだが、それに位牌（mortuary tablet）が仏壇に安置され、線香やろうそくが手向けられる。さらに故人の好物や食物が捧げられている光景を目の当たりにするのである。奇妙だが、死者との一体感が感じられて好印象をもつ人たちが少なくないようである<sup>11)</sup>。いずれにせよわが国の慣習的感覚では、生と死、霊と肉が渾然一体として融解し、また次の階梯へと変容していくのである。火葬がしだいに行われるようになって、こうした感覚はそれほど損なわれることはなかったといえることができる。

#### e) 霊肉一体の中の臓器移植

生と死が連続的に捉えられていたように、霊と肉も分離不能、というより一体化しているという基本的な観念は現在でもわれわれに忠実に継承されているように思われる。わが国も臓器移植法ができて久しいが、臓器移植が増加しないのはおそらく日本人に固有の心身感に負うところが大きい。臓器移植法が成立（1997年）して以降、それを実施する法的環境はある程度整備されたはずだが、いわゆる欧米先進国ほど国内で移植手術、とりわけて心臓移植は行われてはいない。同法成立後、初めて大手を振って心臓の移植手術がなされたときのテレビ・ニュースの様相を筆者は記憶している。摘出されたドナーの心臓がクーラーボックスに収納され、それが病院から最寄りの空港へ運ばれるのを見ていた沿道の人々のなかには、車に向かって合掌していた者も少なくなかった。その様子はさながら、告別式を終えて霊柩車に乗せられ、火葬場に運ばれて茶毘にふされる遺体を見送る人々のすがたそのものだった。これは心臓がたんなる人体を構成するパーツとしての臓器ではなく、それを摘出されたドナーその人の生命であり、魂が宿った当のものといった思いが

沿道の多くの人々に共有されていたからではないだろうか。移植医療を行なう側やその恩恵を受ける立場からはともかく、仮に手術が成功したとして、レシピアントは生き、ドナーは亡くなるという不平等をハダで直感した人々も少なくはなかったのではないか。搬送の様子は、身体と精神はもともと一体だといったわれわれの感性に逆らう何かがあったからであろう。また、脳死という捉え方は、われわれの感じ方にそぐわないと多くの人々が感得したからに他ならない。つまり、生と死も〈しょうじ〉として一体的に受け取られていたように、現在でもサイコ（psycho）とソーマ（soma）も相即して捉えられているのである。

### 第3章 現代日本社会の青年世代と若年層の「いのち」感覚

#### a) 感覚としての生死「感」

われわれの社会には規範というものがある。人々の共同生活を規制し、道徳的な基準をもたらすという点で不可欠な要素である。だが、人間社会には規範や規制だけでは収まりきれない事柄も少なくない。そこに共同幻想のようなものが介在してくる余地がある。人間関係を作りだし、そうした必要性の中で、幻想というか虚構に基づいてわれわれが行動することも少なくない。そして、人間社会にはフィクションだということを知っているけれども、それを真実だとしておくという一面もある。虚構と知りつつあえて信じるということがあるだろう。それは人間が社会生活を営んでいくうえでのひとつの知恵だといえる。実際の生活面での様々な不合理、不如意をなだめ、直接の衝突を回避する知恵であり、社会生活をお互いが少しでも軋轢を低減させながら営んでいくためには欠かせない大きな要因になっているのである。

たとえば、「人命は地球より重い」という言葉がある。実際の社会生活の中では人の命が紙くずのようにうち捨てられ、まったく省みられないかのような事実が日々、頻発している。にもかかわらず、建前としてそのようにしておかないと人間社会自体がなりたちえないのである。そのようにしておかなければ、なによりも自分自身の生命そのものの存続が危ぶまれることがあるからだ。

かつて「なぜ人を殺してはいけないのか」という小学生の質問に、並み居る各界の著名人が即答に窮した放送場面があった<sup>12)</sup>。この問いは倫理の問題であり、かつ死という人間にとって究極の質問である。良識あ

る大人、社会人の世界では「人を殺してはいけない」というのはいわずもがなの公理であるわけだ。ところが、あまりにも明々白々としているはずの建前を、正面きって問い糺されるとかえって質問を受けた側が答えに窮してしまう。そのようなことは当たり前ではないか、という常識とか通念がそのままではもはや通用しなくなっていることを、この質問は「常識人」に投げかけている。理由はない、ただそのようになっていくのだ、といった方が適切なのにあえて問いに答えようとする。はっきりとした理屈や、理由なしに運ばれていく事柄は日常世界には夥しいほど存在するが、死や生の問題はまさにそういった問いの最右翼にあると、いいいのではないだろうか。放送に出演した著名人たちが小学生の間に答えられなかったことから、後日、雑誌で再度取り上げられた。執筆者は別の人々である。「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いの前に、深刻な生死観などはまったく沈没させられてしまっている。この落差は大きいといわなければならない。

生死「観」という表現には、一般には多年の経験や研鑽・修行の結果たどりついた生と死をめぐるの確固とした信念とか、ようやくたどり着いた死と生についての達観とか諦観という意味が含まれるはずだ。個々の人間にとって生涯にわたる重大なテーマである。しかしながら、小論の冒頭にも述べた昨今の殺傷事件などを見るにつけて、それぞれの人の意識がおよぶ範囲でもがき苦しんだ挙句得られたひとつの到達点といった様子は、むしろあまりないように思われる。その場での自己抑制がきかない「キレル」とか「ムカツキ」という一時的な感情の激高、その場での逆上によって引き起こされる悲劇である。それは隠忍自重した揚げ句、ついに堪忍袋の緒がきれてことに及ばざるを得なくなったという体の所業ではない。むしろ感覚とか、もっと軽く響く表現でフィーリングとでもいった方がより適切ではないか。一過性の激情であるがゆえに長引かない。一時の感情の高ぶり、刹那的であって、その分だけ後悔や懺悔の気持ちが湧き出て来にくいのではないだろうか。

#### b) 若年世代の人工中絶と「水子供養」

このような感覚やフィーリングが現在の日本社会では、若年層に比較的顕著に現れていると考えられる。そうした現象のひとつが人工中絶の様子である。厚生労働省の統計によるとわが国の妊娠中絶は戦後このかた、妊娠可能なすべての世代において一貫して減少し

てきた<sup>13)</sup>。戦後すぐには1組の夫婦（もしくはカップル）に4.5人の子どもが生まれていたが、経済活動がある程度の段階で一段落して日本人全体の生活に多少のゆとりができるようになると、こんどはしだいに少子化に転じている。この過程で医療技術も大幅に進歩し、従来の技術・知識では育てられなかったさまざまな問題をもった乳幼児も、たとえば保育器などで十分な処置をほどこし、普通の成人に育て上げることができるようになった。

これと並行して興味深いのは1970年代半ばごろから、「水子供養」<sup>14)</sup>が10歳代、20歳代を中心に、多く行われるようになったことである。水子とは人工中絶したり、流産した子のことをさす。従来、民間では出産後間もなく亡くなった子どもを含めて、赤子の葬送は成人のそれとはやや異なる仕方でされることが多かった。生まれて間なしの子どもが亡くなった場合には、繭のうち粗悪なものを水に戻したように、そのまま水に戻した。羊水で満たされていた子どもを、母親の体内に戻すといった観念で、大人の葬儀のような「送り方」はしなかったのである。生と死を同時に象徴する「水」にことよせて、中絶された子どもがミズコと呼ばれたのはうなずける。現在とは異なり乳幼児の死亡率がもっと高かった時代には、せつかく生まれた子どもがそのまま成人することの方がむしろ少なく、したがって「7歳までは神のうち」といわれたように存在そのものが常に揺らいでいたのである。もっとも、この類の宗教的習俗は、主に仏教的な観念に後押しされた地蔵信仰と一体的に行われてきたもので、それ以前には「水子」ではなく、「子育て」の方に重心があった。避妊の知識や技術もいまほどは普及・発達していなかった時代に、思わず妊娠してしまうことは往々にしてあったであろう。また、せつかく子どもをやどしても産み育てられるだけの経済的余力が親や親族の側になく、墮胎するという事態も数多くあったと考えられる。それが「水子」に移行するようになったのは、中絶が広く行われるようになったこととおそらく無縁ではないと思われる。こうした兆しはそれまでもあったのだが、奈良の弁天宗などのいわゆる新宗教集団をかわきりに、鎌倉の長谷寺や京都化野の念仏寺などがこれに続き、さらには石切神社や、やはり神道色の強い黒住教までもこうした動きに連動し始めた。これに続いて一般のどこにでもある寺院や宗教集団でも、水子供養を活動の一部として行うようになってきたのである。元来こうした事柄は社会の表面に出るような、また出るべき現象でもないと思われるが、いま

やこの醜悪な習俗が現代日本の一側面を顕在化させている。

その原因の大半が、貧困や医学の未発達が原因しているのではないことは明らかだ。戦後の経済成長は、いちおうわが国の貧困を多くの人々から追放するのに成功したはずである。また、戦前までの平均余命を著しく押し下げていた乳幼児の死亡率の高さも、医療技術の発展や国民の衛生観念の進歩、食料事情の改善などの諸条件の好転によって大幅に向上した。したがって以前のような事情で、墮胎・中絶するわけではない。

ここで考えられるのは、戦後の日本社会における広い意味での人権意識の伸張、個人の自由裁量の範囲の拡大がひとつの大きな因子になっているのではないか、という仮説である。個人としての意識の顕在化や自由意志の拡大は、日本人の性行動にも少なからざる影響をおよぼしている。それはすなわち「生の行動」でもあるだろう。また、そうした態度は手のひらの両面のように、「死の行動」の問題にも深く関わるはずである。言葉のうえだけでなく、実際の行動においても1960年代のアメリカで先鞭をつけたといえる性の自由化の主張は、抑圧されてきた性を解放した一方で、安易でカジュアルな性行動を世界規模で公然のものとした。これを広域化、迅速化したマス・メディアが後押しするかたちで、あらゆる地域、世代で性に関する情報をばらまき、さらには表現の自由というたてまえのもとで性行動を煽る結果になっていった。性行為の低年齢化、安易な性行動の誘因となったと考えられる。その一方で結果として望まない妊娠や、したがってその後の処理として墮胎・中絶を導きだしたという見方はおそらく間違っていない。1975年以降、密かに隆盛を見せる「水子地蔵」の供養はその現れといっている。

「水子供養」の増加は中絶をするに至った母親の後悔や沈鬱、後ろめたさに付け込んだ宗教者や業者側のあざといたくらみ、とだけ解するわけにはいかないであろう。あるいはこの世に生を受けられなかった子どもの霊が祟るといった伝承に対する怖れだけでもない。経緯や事情はどうあれ、いったん自らの身体に宿った生命を、自らの判断で絶つという心境は、当人の身体と精神にとって強いストレスになることは容易にうなずける。その懺悔や後悔の念を含めて、わが国に伝えられてきた地蔵尊の「子育て」のひそみにならって、「水子地蔵」とするのほとんど距離はなかった。いったん水に戻した子どもはやがて、いつの日か再び帰ってくるかもしれない。それまでいっとき地蔵菩薩

に預かってもらうといった気持ちなのだろう。やがて生まれてきた子どもは、かつていた家族、たとえば祖父に似ており、あるいは生まれ変わりかもしれないと納得するのかもしれない。

1960、70年代は医学的知識、技術が急速に進歩、発展し、それが一般大衆に普及し始めた時期でもある。「胎児学」というような、それまで一般人がほとんど知ることなかった胎児の成長過程などについての知見も広く知られるようになっていく。受精した細胞は分裂、増殖を繰り返す、やがて心臓が鼓動し始め、羊水を出し入れして呼吸を行うようになり、さらに成長を遂げて口や手足を動かす。半年もすれば母体を通じてはっきりと外界の様子を感知し、精神活動も行えるようになっていく<sup>15)</sup>。こうした胎児の実態が母親たちにも周知されるようになってくると、従前のような母体に宿った生き物ではもはやなくなってしまった。そこには生きようする意思をもった、ひとつの人格を認めないわけにはいかないのではあるまいか。貧困で産めないなどのやむ終えない理由ではなく、親たちの勝手な都合、安易な性交渉の結果できてしまった招かれざる子ども、といったかたちでこの世から抹殺されるのだとしたら、意思をもった（精神活動を開始し始めた）一人の人間としての子どもはおそらく黙っていない。それは法的な意味での意思とか人格を象徴する胎児という意味ではなく、生まれ出ようとする生命のいとなみそのものはたらきだからである。

親の側もそのことに気づいて、良心の呵責にさいなまれることもあるに違いない。むしろ以前、まだ共同体が機能していた時代の母親は、そういった心理的な苦悩を味わうことが少なかったのではないだろうか。共同体としての、また伝承ないし継承されてきた精神の慰撫装置をもっていたからである。しかし、そうした装置を最早もたない、換言すれば家族の紐帯が弛緩し、共同体機能もきわめて脆弱でしかない現代の親たちは、かつては共同体意識によって支えられ、緩和されてきた苦悩を一人で背負わなければならない状況にあるといえる。そこに現代の中絶トラウマを癒してくれる装置としての「水子供養」が登場する余地があったのではないか。

もちろんそうした深刻なトラウマに悩まされる人たちがいる一方で、墮胎の処置を受けてもごく軽い手術か傷の手当でもするかのように、平然として医療施設をあとにする若い世代の人たちも少なからずいるらしい。彼らにとって、胎児と自分とは別の存在、中絶した胎児は単なるモノでしかないのかもしれない。人間

としての生命は物象化されてしまっている。ある人々は彼らをして、人間としての基本的な情感や感性に欠ける気の毒な人たち、冷たい人たちと一蹴してしまうかもしれない。

このように、人工中絶という一事をとっていても、一方では現代のわが国における生と死の親和性や連続感が存在し、他方では断絶と即物性とをこもごも看取することができるであろう。

## ま と め

小稿で「生死」をことさら〈しょうじ〉と〈せいし〉という2通りの読み方をしたのは他でもない、現代の日本において先に見たように、伝統的な生死(しょうじ)の連続感が、かつての時代ほどの信憑性をもつことが希薄になりつつも依然として存在する一方で、新たにきわめて無味乾燥で、直截的に断絶した生死(せいし)の観念が生まれつつあるのではないかということを書いたかったからである。本論でも指摘したように、近年の若年者層には生と死の交換は可能かつ容易だという感覚が、並行してしだいにそなわりつつあるのではないか、もっというと生と死との違いがはっきりしなくなったのではないかと思われる。

だが、このことは決して若年世代だけに見られる現象ではない。過去10年間にわたり、わが国の自殺件数が毎年3万人を優に超えている事実はどうのように説明されるべきだろうか。経済的理由による50歳代の男性のそれが突出しているが、わが国の自殺率24.0(人口10万人比、2004年)はいわゆる先進国中で最大の数値である<sup>16)</sup>。新聞でも自殺を考えたという中小企業の従業員が10人に一人の割合であると報道された(朝日新聞、2007年7月14日)。従来の調査で勤労者の0.1%前後に自殺企図があるとされていたことから考えれば、かなりの高率であるといえる。また、しばしば指摘されてきたように、自殺の企図者が完遂者の十数倍というのが事実であるとすれば、3万数千余人という数字はまさに氷山の一角にしかしすぎない。潜在的には驚くほど多くの企図者、さらに少しでもそのことが脳裏をかすめた人の数は底がしれないほどに上ると考えて差し支えあるまい。日本社会では自殺を痛ましい出来事とは考えつつも、必ずしも否定しきれない気質のようなものがある。もちろん、自殺などはしないにこしたことはないにしても、この世が生きるに値しないとか、意味がない、あるいは生きることに飽きた、十分に生きたと本人が思うのであれば、それ

はそれでひとつの選択だと考える人もありうる<sup>17,18)</sup>。現実の生活が苛烈な分だけ、知らぬ間に危険領域に足を踏み入れてしまうのかもしれない。

上の新聞記事が掲げる数字に対して、いくつかの見方があるだろう。ここでは、2つの事柄を指摘しておきたい。まず、われわれの祖先たちが、人は死ねばすべて終わりという捉え方を必ずしもしてこなかったように、現代を生きるわれわれにもそうした観念が依然として強く息づいているのではないかということである。盆や彼岸には「たましい」があのだとこの世とを往還し、命日には生前に住んだ家に戻るという単純だが素朴な着想は、たとえば京都の大文字の送り火などに典型的に見られるように、われわれの中で現在でもいくらかは息づいている。あの世はそれが実際どこにあるとされているわけでもないにせよ、われわれに漠然とした、しかし決して荒唐無稽として、無碍には退けられないある種の救いを提供してきたし、現在でもある程度そうである。ここにはあやふやだが「この世」と「あの世」との往還がある、と予感させる何かの確かに存在する。何か突発的な事件の犠牲者の冥福を祈るさい、現代のわが国では、テレビのインタビューなどに答える人たちは、たいてい無頓着か無意識に「天国に行って幸せに」などと答えることが多い。天国は永遠の命を約束された人々の魂の安息の地で最早移動する必要はないはずだが、われわれが抱いている観念では、この時ばかりは「天国」に行った人の魂も「あの世」や「浄土」から帰って来て、時季が来ればまたそこに帰っていくかのようである。死者や祖先の世界と現世となだらかな連続感でつながっているのである。そこでは漠然とした安心感のようなものが提供される。そうしたところでは、たとえ自殺したとしても、それを受け止めてくれる精神的な受け皿のような何かがある、と暗に想定しているのかもしれない。

2つ目は、現在の比較的若い世代では、生(現実の世界)と死(あの世)を分かち障壁はもっと脆弱で薄い、あるいはさらに曖昧になりつつあるのかもしれないということである。小論執筆中の8月22日、山口県で母方の祖父を殺害した高校生が東京秋葉原で逮捕された。警視庁の調べに逮捕状を見せられると「わかりました。おじいちゃんは死んだんですね」と話したという。動揺した様子もなく淡々とした受け答えだったのだそう(京都新聞、2007年8月23日)。

死後すでに数年経った故人に対して、ほとんど諦めがつかずいまだに欠かさず困難な山登りを自らに課している父親がいる一方で、いとも簡単に肉親を殺害し、

そのことに平然としていられるというメンタリティーの相違はどうしたことだろうか。もちろん生活歴や個人的な人間関係の濃淡など個々の条件の違いを勘案するにしても、この大きな感情の落差には驚嘆せざるをえない。生と死に対する感じ方、捉え方のグラデーション、つまりひとつの色彩から少しずつ微妙に変化しながらやがてはまったく別の色合いに移っていくそれである。現代のわが国の社会において、生と死について濃淡の色合いのひろがりや奥行きがいよいよ拡散しつつあるのではないか。それはわれわれが生きていくさいに手がかりになる確固とした生死観を提供しえていないという点において、単に拡散というよりは〈危うさ〉と表現した方がよりの確であるかもしれない。

#### 参考文献

- 1) 法務省法務総合研究所編. 犯罪白書 平成19年版 再犯者の実態と対策. 東京：佐伯印刷；2007. p. 10, 12.
- 2) 朝日新聞, 西部本社. 2005年1月25日 朝刊25面.
- 3) 福岡賢正. 隠された風景. 鹿児島：南方新社；2004. p. 71-134.
- 4) 内澤句子. 世界屠畜紀行. 大阪：解放出版社；2007.
- 5) 厚生労働省大臣官房統計情報部編. 人口動態統計 平成18年中. 東京：厚生統計協会；2006. p. 123.
- 6) 岸本英夫. 生死観四態. In：岸本英夫編. 宗教現象の諸相. 東京：大明堂；1975. p. 59-77.
- 7) 倉野憲司校注. 古事記（岩波文庫）. 東京：岩波書店；1928. p. 23-31.
- 8) 柳田國男. 常世国. In：定本柳田國男集 第1巻. 東京：筑摩書房；1968. p. 8, 90, 91.
- 9) 九相詩絵巻. In：小松茂美監修. 日本絵巻大成 7巻. 東京：中央公論社；1977. p. 109-15, 中村溪男 解説 p. 165-70.
- 10) 十王経. In：岩波仏教学辞典. 東京：岩波書店；1989. p. 391.
- 11) 島崎義孝. エイズと仏教. In：村本詔司, 逢坂隆子編. エイズの周辺. 八幡：法政出版；1996. p. 149-74.
- 12) 瀬戸内寂聴ほか. 14人が答える「なぜ人を殺してはいけないのか」と子供に聞かれたら. 文芸春秋2000；78（14）：166-90.
- 13) 厚生労働省. 母体保護統計報告（優生保護統計報告）平成12年 第14表 人工妊娠中絶実施率（15歳以上50歳未満女子人口千対）, 年齢階級・年次別. [引用2008-05-15]. URL: [http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/data/220/2000/toukeihyou/0003490/t0054094/nn14\\_001.html](http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/data/220/2000/toukeihyou/0003490/t0054094/nn14_001.html)
- 14) LaFleur WR. Liquid life. Princeton, N. J.: Princeton University Press; 1992. p. 14-29.
- 15) 三木茂夫. 胎児の世界（中公新書）. 東京：中央公論社；1983. p. 71-152.
- 16) World Health Organization. Suicide rates (per 100,000), by gender, Japan, 1950-2004. 2007. [引用2008-05-15]. URL: [http://www.who.int/mental\\_health/media/japa.pdf](http://www.who.int/mental_health/media/japa.pdf)
- 17) 須原一秀. 自死という生き方. 東京：双葉社；2008.
- 18) フィリップ・カプロ著, 島崎義孝訳. 無生死の世界. 岡山：ふくろう出版；2004. p. 7-13, 95.